

はじめに

看護大学や看護専門学校では、「ケーススタディ」「事例研究」「看護研究」など、さまざまな科目名の授業で、受け持った患者さんの事例をまとめた経験があると思います。就業してからも、臨床では必ずといってよいほど3年目か4年目ごろにこうした研究を行う機会をもつことができます。“できます”という言葉は前向きな表現ですね。すなわち、「病棟で行う研究をしたい」と自ら申し出ると、たいていは実践研究を行うことができます。

しかし残念ながら、率先して「研究したい」と申し出る看護師さんをあまりみたことがありません。看護師は専門職業人として教育されます。そのため、どの学校のカリキュラムにも研究に関する科目がありますが、各学校の到達レベルはまちまちです。先行研究の文献をしっかりと読み込むレベルを求める学校、研究計画書のみ書くことを求める学校、臨地実習で印象に残った事例を事例研究やケーススタディとして論文形式でまとめさせる学校、あるいは、卒業論文として論文形式にまとめて研究発表会を行う学校、などとさまざまです。

このように、各学校により受ける教育内容に違いがあっても、卒業後は「看護師」として同一の国家資格の持ち主であることに変わりありません。所属する組織やその実態が違って、私たちは常に専門職業人としての自負をもつことが大切です。

さらに、臨床で看護研究を行うことの重要性は、「ICN(国際看護師協会)看護師の定義」の5番目で「研究に従事すること」と、示されています。

自ら「研究に挑戦してみよう」と思ったとき、「臨床の現場でどのように考えれば研究のヒントが浮かぶのだろうか…」と、迷ったときなどに参考にできる本を目指しました。実践のまっただなかで「この患者さんを研究の対象にしてみたらどうだろうか」など、ふっと頭をかすめたとき、導いてくれる本があったらと思い、病棟内で起きている事例(ケース)のまとめ方を中心に書いています。

また、看護学生さんがケーススタディとしてまとめるときの参考になるように、実習記録からのまとめ方や、ヒントとなる方法論も加えておりますので、参考にしてください。

さらに、卒業し看護師となったときに加入することになる日本看護協会の会員で構成される、日本看護学会学術集会の応募方法や抄録作成方法、発表時のスライド作成方法なども含めております。論文を作成し、論文投稿・掲載まで進んでほしいと思う気持ちを、本書にこめました。

本書の改訂にあたりGakken取締役 小袋朋子氏からは温かいご支援をいただき、編集では森友紀さんには大変お世話になり、完成したことを感謝いたします。

2024年12月

古橋 洋子